

Title	六/十二世紀のシリアにおけるマドラサの発展
Sub Title	The development of Madrasas in Syria in the 6th/12th century
Author	湯川, 武(Yukawa, Takeshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.50, No.記念号 (1980. 11) ,p.343- 365
JaLC DOI	
Abstract	In the studies of the history of the madrasas in medieval Islam, it is on the Madrasa Nizamiya in Baghdad founded in 1067 by the Seljukid vizier Nizam al-Mulk that scholarly attention has been concentrated. It may be rightly said that in terms of historical importance no other madrasa could boast itself more than the Nizamiya. Geographically, madrasas, however, did not cease to develop after it. It was considerably after the foundation of the Nizamiya that the number of madrasas in the area west of Iraq increased to a great extent. In Mesopotamia and Syria there were founded a few madrasas in the late 5th/11th century. Once started, the spread of madrasas got great momentum throughout the 6th/12th century. Among those who built maadrasas Nur al-Din was the most important. He built many madrasas in Aleppo, Damascus and other cities in Syria where there could be seen a florescence of learning. Sources do not tell us the motives of his great enthusiasm in establishing madrasas clearly, but indirect evidences suggest that he aimed at spiritual and ideological unification through it. His ultimate purpose seemed to build up a powerful stase and carry on effective counter-attack against the Crusades. For this he utilized the Sunni orthodoxy and the madrasa system to teach and establish it among the Muslim subjects. At the same time he needed both moral and practical assistance from the 'ulama'. Madrasas were the institutions of higher education from which 'ulama' were produced. His enthusiasm in establishing madrasas was succeeded by non-Arab military elites and they continued to build many madrasas for the rest of the 6th/12th century after his death. But now the motivation had changed, and the madrasa-building became a kind of status symbol of the military class. This change paralleled the change in the chracter of the education in madrasas. It began to fall into mannerism.
Notes	東洋史 第五〇巻記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0347

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

六／十二世紀のシリアにおけるマドラサの発展

湯 川 武

伝統的なイスラム的教育において、高等教育機関としてのマドラサはきわめて重要な機能を果たしてきた。このマドラサの歴史の研究において、必ずと言ってよいほどよく取上げられるのは、有名なバグダードのニザーミーヤ学院 al-Madrasa al-Nizamiya である⁽¹⁾。マドラサの発展史上、ニザーミーヤの果たした役割は、決定的とも言えるほど重要なものであった。ニザーミーヤの歴史的重要性をマドラサの分布の拡大という点から見ると、ホラサーン地方を中心として東部ペルシャ地域で生まれ発展したマドラサが、アラブ地域へも広がっていく契機になった点にあると言える。

さて、ニザーミーヤに比較すると、それ以後のマドラサの発展についてはこれまで論ぜられることが少なかった⁽²⁾。たしかにニザーミーヤは、アラブ地域のマドラサ建設に刺激を与え、新しく建てられるマドラサのモデルとなったものではあるが、だからといってニザーミーヤの研究だけで、マドラサの発展の歴史のすべてが解明されるわけではないことは明らかである。A・H六／A・D十二世紀の半ば以降のシリア、少し遅れて七／十三世紀以降のエジプトにおけるマドラサの建設ブームとも呼ぶべき現象は、単に教育史からだけではなく、もっと巾広い歴史的文脈の上でより深く詳しく検討する必要があるであろう。

本小論では、地理的にはシリアを中心としつつ上メソポタミア地方も含め、時間的にはニザーミーヤ以後、すなわち五

／十一世紀末から六／十二世紀末までを扱う。内容としては、先ず各地のマドラサがいつ、誰によって建てられ、どの法学派に属していたか、などの具体的な点を整理しつつ見てゆく。次いで、歴史的背景を考察しながら、それらの具体的な事実の持つ意味を探ってゆきたい。

二 各地のマドラサの創立

(1) 上メソポタミア地方

セルジューク朝のワジール（宰相）、ニザーム・アル＝ムルクがバグダードのニザーミーヤを開いたのは、四五九／一〇六七年のことである。彼はバグダードのほかにもセルジューク朝支配下の地域の数ヶ所にマドラサを建てた。

上メソポタミア地方で最も古いマドラサは、モスルとジャズイーラト・イブン・ウマル Jazirat Ibn Umar のニザーミーヤである。

ジャズイーラ地方の中心地であるモスルのニザーミーヤの正確な創立年代はわからないが、ニザーム・アル＝ムルクの没年が四八五／一〇九二年であるから、それより以前であるのは当然である。モスルのニザーミーヤは、他のニザーミーヤと同様にシャーフィイー派のマドラサであり、初代のムダッリス mudarris（教授）にはモスルのカーデイーのアッ＝サディード al-Sadid Muhammad b. 'Ali が任命された。⁽³⁾

ジャズイーラト・イブン・ウマルのニザーミーヤについては記録がほとんどなく、ただその存在が認められるのみである。⁽⁴⁾

この二つ以外には十一世紀中に上メソポタミア地方でマドラサが建設されたという記録はない。しかし十二世紀になると各地にマドラサが建設されるようになりその数は増していった。

上メソポタミア最大の都市であり、政治の中心でもあったモスルは、文化活動においても他に抜きんでていた。モスル

のマドラサについては *Divahij* の研究があり、そこにマドラサのリストと各マドラサについての主要なデータがあげられている。⁽⁵⁾ ここではそれとの重複を避けるため、十二世紀末までにモスルに建設されたマドラサについてごく簡単に述べるに止める。

ニザーミーヤに次いで、モスルに二番目に建てられたモスクは *al-Atābakiya al-'Atīqa* である。このマドラサの創立は五四一／一一四六―七年で、ニザーミーヤ創立から五十年以上たっている。⁽⁶⁾ しかしその後は着実にマドラサの数は増え続け、五八〇／一一八四―五年にモスルを訪れた *Ibn Jubayr* によれば、その数は六ないしそれ以上で、「それらはまるで立派な城のように見える」ほどであった。⁽⁷⁾ 前述の *Divahij* の研究と史料とをつきあわせると、十二世紀末までに合計八つのマドラサがモスル及びその近郊に建設されている。その他に十二世紀末から十三世紀の初めの数年にかけての時期に創立されたと考えられるものが一つある。十二世紀後半に本格化したマドラサ建設は、十三世紀に入ると一そうさかんになり、一二六〇年代にはその数が二八に達していたという。⁽⁸⁾

法学派の所属という点から見ると、十二世紀の八つのマドラサ（ニザーミーヤを除く）のうち五つはシャーフィイー派、二つはシャーフィイー派とハナフィイー派の共用、一つは不明である。ここからも明らかのように、モスルにおいてはシャーフィイー派が圧倒的に優勢であった。

次に創立者を見ると、三つがザンギー朝君主によるものであり、他の三つがザンギー朝アミールの創立にかかり、一つがザンギー朝のワジールによって建てられている。ただ一つだけが商人によって造られた。このことから明らかのように六／十二世紀中のマドラサの建設はザンギー朝及びザンギー朝国家の中枢をなす人々の主導によっていたと言える。

上メソポタミアの他の町にもマドラサは建設された。ジャズイーラト・イブン・ウマルには前述のニザーミーヤを除いて四つのマドラサがあった。シンジャル *Sinjar* には十二世紀半ばには六つのマドラサがあった。そのうちの四つはザン

ギー朝君主かアミールによって建てられたものである。ラッカ Raqqa にはシャーフィイー派とハナフィー派のマドラサが各一校ずつあった。ニシビン Nisibin⁽⁹⁾ エデッサ al-Ruha⁽⁹⁾ イルビル Irbil⁽⁹⁾ ラース・アル・アイン Ra's al-'Ayn にはそれぞれ一校ずつマドラサがあった。この数字は、一一七〇年代の後半ぐらいまでのものであって、十二世紀の末までには当然これより増していたと考えられる。モスル以外の上メソポタミアの町についてはもっと詳しい研究を待たねばならない。現段階では詳しいデータはほとんどない。

(2) シリア

i. アレッポ アレッポのマドラサについては幸いなことにかなり詳しいデータまで得ることができる。ここでは主として Ibn Shaddad の記述にしたがってアレッポのマドラサについて概観していく。⁽¹⁰⁾ ただしアレッポのマドラサについては、すでにエリセーエフ N. Elisséeff が、ヌール・アッ・ディーン時代の終りに至るまでのアレッポのマドラサのリストを作成し、それぞれのマドラサについては基本的なデータを掲げているので、⁽¹¹⁾ 十二世紀末までのそれ以後の時期のマドラサをつけ加えて、ごく簡単なリストにして示すことにする。

1. al-Zajajiya 五一六／一一二二—三年にアレッポの領主 *shahib* の Badr al-Dawla Sulaymān b. Artuq が創立。アレッポで最初のマドラサ。シャーフィイー派。
2. al-Niffariya al-Nuriya 五四四／一一四九年。シャーフィイー派。
3. al-Hallawiya 2と同年。ハナフィー派。
4. al-Shu'aybiya 五四五／一一五〇年。シャーフィイー派。
5. al-'Asrūniya 五五〇／一一五五—六年。シャーフィイー派。
6. 名称不明。マリーキー派。

7. 名称不明。ハンバリー派。

2から7までの六つのマドラサは、ヌール・アッディーンが創立した。

8. al-Muqaddamiya 五六四／一一六九にアミールの 'Izz al-Din al-Muqaddam が創立。ハナフィー派。

9. al-Asadiya アミールの Asad al-Din Shirkuh が創立。シャーフィイー派。

10. al-Haddadiya 五七二／一一七五—六年には存在していた。アミールの Husām al-Din Muhammad が創立。ハナフィー派。

10までがヌール・アッディーンの没年までにアレppoにあったマドラサで、そのうちの六つはヌール・アッディーンによって創立されたことは注目に値する。そして他の四つのうちの三つもヌール・アッディーンのアミールたちによって建てられたもので、マドラサ建設がヌール・アッディーンによっていかに強力におし進められたかがわかる。これより後、十二世紀末までのマドラサは次のとおりである。

11. al-Jurdikiya 五九二／一一九四—五年、サラディンのアミール、'Izz al-Din Jurdik が創立。ハナフィー派。

12. 丘のマドラサ al-Madrassa bi'l-Jubayl 五九五／一一九八—九九年にアレppoの名門アジャミー家 Banū al-'Ajami の一員が創立。シャーフィイー派とマリーキー派。

13. al-Rawahiya 十二世紀末か十三世紀初め、ウラマーの一人が創立。シャーフィイー派。

14. al-Sayfiya 五九八／一二〇一—二年、アミール Sayf al-Din 'Alī が創立。ハナフィー派。

15. 名称不明。14と同じ創立者が十二世紀末か十三世紀初めに建てる。マリーキー派、ハンバリー派。

16. al-Shadhbakhtiya 十二世紀末。アミール Jamāl al-Din Shadhbakht が創立。ハナフィー派。

17. 城壁外の al-Shadhbakhtiya 16と同様。

この他に少なくとも三つのマドラサが十二世紀末までに建てられたであろうと考えられる。三つともハナフィー派で、

二つはアミールによって創立され、もう一つは創立者不明である。

六／十二世紀末までのアレppoのマドラサを見るといくつか特徴的な点があげられる。まず第一に前にも述べたようにヌール・アッディーン時代にさかんにマドラサが創立されたこと。第二に次の波は五九〇／一一九〇年代に來ていること。これはアイユーブ朝の al-Malik al-Zāhir Ghiyāth al-Dīn (六一三／一二一六没) の時代である。創立者を見るとここでもアミールが多い。十二世紀全体を見ると軍人層でない創立者を持つのはわずかに二つにすぎない。

法学派の所属を見ると、十二世紀末までに創立されたであろうと考えられる三つのマドラサをも含めると、総計二十のマドラサのうちハナフィー派が十、シャーフイー派が六、マリーキー派が一、ハンバリー派一、二学派兼ねているもの三となっている。モスルの場合と比較してみるとハナフィー派の優勢が目につく。ただしマドラサ数の比較だけで、法学派間の勢力を測るのは難しい。というのはマドラサの大きさ(ムダッリス以外の教師の数、収容学生数、ワクフの規模など)⁽¹²⁾やムダッリスの質などがあいまってマドラサの格となっており、それを考慮に入れない比較はあまり意味がない。しかし一方ではハナフィー派のマドラサの数の多さは、ハナフィー派マドラサに対する需要と供給がアレppoにおいてはかなりの程度に高かったということを示しているのもたしかである。特にヌール・アッディーンが創立したハッターウィーヤ(3)はその点で重要である。ヌール・アッディーンがアレppoに新しくハナフィー派のマドラサを造ってハナフィー派法学を広め、同派のウラマーを養成しようとしたことは、一般的な正統派振興策という意味では理解できても、具体的意図はよくわからない。いずれにせよ結果としてはハナフィー派学徒の数は増し、十二世紀の末頃にはより多くのハナフィー派マドラサが建設されるようになった。

モスルと比べて特徴のあるもう一つの点は、アレppoにはマリーキー派とハンバリー派のマドラサが存在したという点である。リストの6、7のマドラサは独立したマドラサではなく、モスクの一部をマドラサとして使っているものであり、両学派ともアレppoでそれ程影響力があったわけではないが、これもヌール・アッディーンの一般的な正統派振興

策の一環と考えることができるであろう。

マドラサ創立者の意図は別にしても、アレppoにこれだけの数のマドラサが建設されたことは、アレppoがそれを経済的に支えるだけの力を持ち、また文化的にも、例えばモスルと比較してみると、ずっと大きなセンターとしての役割を果していたことがわかる。

ii. ダマスカス ダマスカスのマドラサについても、アレppoと同様にエリセーエフのリストが、ヌール・アッ＝ディーンの没年までをカヴァーしているので、ここでは十二世紀の残りの部分に創立されたマドラサを追加しながら、ごく簡単に述べてゆく。⁽¹³⁾

1. al-Sādiriya 四九一／一〇九八年、セルジューク家の Duqāq のアミール Shujā' al-Dawla Sādir が建設したハナフィー派のマドラサ。これは多分ダマスカスそしてシリアで最古のマドラサである。これより以前に al-Ghazaliya というマドラサがあったことを示唆する史料もあるが、この時期のダマスカスについてもっとも信頼できる Ibn 'Asākir には何も述べられていないところを見ると、マドラサと呼べるほど整備されたものではなかったであろう。

2. al-Aminiya 五一四／一一二〇年にダマスカスのアミール Amin al-Dawla Kastikīn が建てたダマスカスで最初のシャーフイー派のマドラサ。

3. al-Mu'iniya 五二四／一一三〇年、Tughtakīn のマムルークであった Mu'in al-Dawla が創立。ハナフィー派。
4. al-Tarkhūniya 五二五／一一三一年に、アミール Sungur al-Mawṣilī があるアミールの邸宅をハナフィー派のマドラサにした。

5. al-Balkhiya 五二五／一一三一年以降。アミール Ukuz al-Duqāqī が創立。ハナフィー派。

6. al-Khātūniya 五二六／一一三二年、Duqāq の妹の Zumurud Khātūn が創立。ハナフィー派。
7. al-Mujāhidiya 五二九／一一三五年、アシール Mujāhid al-Din Būzān が創立。シャーフイイー派。
8. al-Sharafiya 五三六／一一四二年以前に Sharaf al-Islām al-Shirāzī が創立したダマスカスで最初のハンバリー派のマドラサ。

9. al-Ukuziyya 五三六／一一四二年にアシール Asad al-Din Ukuz が創立。シャーフイイー派。
10. al-Mujāhidiya 7 と同じ創立者によって五三九／一一四五年にダマスカスの城壁外に造られた。シャーフイイー派。
11. al-Jārūkhiya 五四二／一一四八年以前にアシール Sayf al-Din Jārūkh al-Turkumānī によって創立された。シャーフイイー派。

12. al-Mismāriyya 五四六／一一五二年以前にシャイフ Mismār al-Hawrānī によって建てられたハンバリー派のマドラサ。

13. al-Tashīya 五五〇／一一五五—六年にアシール Tash al-Din al-Duqāqī により創立。ハナフィー派。al-Nashīya と書いてある史料もある。

14. Madrasat al-Kallāsa 五五五／一一六〇年にヌール・アッディーンにより建築工事が開始される。完成年代は不明。シャーフイイー派。

15. al-Mu'iniyya 五五五／一一六〇年、アシール Mu'in al-Din Unur が創立。ハナフィー派。

16. Madrasat Altash 五五〇年代／一一六五年までにアシール Altash al-Duqāqī が建てた。ハナフィー派。マドラサというよりもマスジドとして知られていた。

17. al-'Imādiyya おそらく五四四／一一五〇年に創立された。五六六／一一七〇—一年にヌール・アッディーンがシャーフイイー派のマドラサとしてこ入れをして以来 al-Nūriyya al-Ṣughrā (小ヌーリーヤ) とも呼ばれるようになった。

た。

18. al-Nūriya al-Kubrā 五六三／一一六七—八八年にヌール・アッディーンが創立。ハナフィー派。ダマスカスのハナフィー派マドラサの中で最大のものである。

19. al-Asadiya 五六四／一一六九年以前にアミール Asad al-Din Shirkūh によってダマスカス市外に創立された。ハナフィー派。

20. al-Asadiya 市内にあった。創立者も年代も19と同じ。ハナフィー派。

21. al-Rayhāniya 五六五／一一六九—七〇年、ヌール・アッディーンの奴隷で政府の高官であった Khawāja Rayhān が創立。ハナフィー派。

22. al-Nūriya al-Ṣughrā ヌール・アッディーンの創立。ハナフィー派。

23. al-Nūriya (al-Salāhiya) ヌール・アッディーンの創立にかかるが、建物を完成したのはサラディンである。マリーキー派。

24. al-ʿAdiliya al-Kubrā 五六八／一一七二—三年にヌール・アッディーンが創立。彼の在世中に建物は完成しなかったが教育は行われていた。後にアイユーブ朝のアルアディルが完成した。シャーフイー派の重要なマドラサである。

25. al-ʿAsrūniya 五六九／一一七四年以前にヌール・アッディーンによって創立された。シャーフイー派。

26. al-Khātūniya 五七三／一一七七—八八年にヌール・アッディーンの子の Khātūn bint Unur が建てた。ハナフィー派。

27. al-Iqbāliya 五七三／一一七七—八八年にヌール・アッディーンの子の Khawāja Iqbal が創立。ハナフィー派。

28. al-Taḡāwiya 五七四／一一七八—九九年にサラディンの一族の Taḡī al-Din ʿUmar が創立。シャーフイー派。ダ

マスカスの重要なマドラサの一つである。

ここまでは、ヌール・アッディーン没年以前のダマスカスのマドラサの一覧であるが、すでにこの時期までにダマスカスが一大文化センターになっていたことがよくわかる。

この時期（五七七／一一八一まで）までの二十八のマドラサのうち二十六は、支配層である軍人層あるいはそれに連なる人々によって創立されている。その中でも特に重要なのはアレppoの場合と同じくヌール・アッディーンである。シャーフィー派とハナフィー派を中心としてイスラムの正統派学問を振興しようとする考えは、このリストからも明らかである。

トルコ系を中心とする軍人層のマドラサ建設における目覚ましい活躍に反して、非軍人層でマドラサを創立した者はわずかに二人しかない。その二人ともがハンバリー派の学者であるという点は注目し値いする。トルコ系軍人層とハンバリー派との結びつきはほとんどなかったようである。

二十八のマドラサのうち十六はハナフィー派である。シャーフィー派は九、マリーキー派は一、ハンバリー派二である。アレppoの項でも述べたようにマドラサの数だけで、四法学派間の影響力の比較をすることは危険であるが、トルコ系軍人層とハナフィー派の結びつきは他に比して強かったということはできるようである。

ヌール・アッディーン没後十二世紀末までに建設されたマドラサは次のとおりである。

29. al-Farukhshahiya 五七八／一一八二—三年に Khutlukhiz Khatun (サラディンの一族の一人の妻) が創立。ハナフィー派。

30. al-Jawziya 五八〇年以前。創立者不明。ハンバリー派。

31. al-'Adhrawiya 五八〇／一一八四—五年にサラディンの娘 'Adhrā によって創立。シャーフィイー派とハナフィイー派。
32. al-Jarkasiya サラディン時代(五八九／一一九三年まで)にアミール Fakhr ad-Din Jarkas により創立。シャーフィイー派とハナフィイー派共用。

33. al-Muqaddamiya アミール Shams al-Din Ibn al-Muqaddam がサラディン時代に創立。ハナフィイー派。

34. 名称不明 サラディンが創立。マリーキー派。マドラサではなくザーウィヤであるともいわれる。

35. al-Masrūriya サラディン時代にファールティマ朝の宦官出身でサラディンの臣下となった Masrūr が創立。シャーフィイー派。

36. a-Qassā'iya 五九三／一一九六—七七年に Kukuja というアミールの娘が創立。ハナフィイー派。

37. al-Qaymāziya 五九六／一二〇〇—一年以前にアミール Šarīm al-Din Qaymāz が創立。ハナフィイー派。

正確な創立年代は不明であるが、十二世紀末か少なくとも十三世紀のごく最初に創立されたと考えられるのが六つある。シャーフィイー派のマドラサが四、ハナフィイー派が一、ハンバリー派が一である。六つのうちの五つはアイユーブ朝のマリクあるいはその他の関係者によって建てられている。ハンバリー派マドラサのみが学者によって創立されている。

このようにして見てくると、ヌール・アッ＝ディーン以後も、マドラサ建設のペースは決して落ちるどころかますますさかんになっていったことがわかる。ヌール・アッ＝ディーン時代との違いは、ヌール・アッ＝ディーンのようにマドラサ建設を自ら率先する君主がいなかったという点である。そこではサラディンに当然同様の役割が期待されるが、サラディン自身はダマスカスに大きなマドラサを建設していない。エジプトにおいては、サラディンはカイロにシャーフィイー派のマドラサとして al-Nasiriya を、マリーキー派のマドラサとして al-Qamhiya を五六六／一一七二年に建設している。⁽¹⁴⁾

しかしダマスカス（アレppoも同様）にはそれに匹敵するような業績を残していない。これはヌール・アッディーンがダマスカスとアレppoを本拠地としていたのにサラディンはむしろカイロを本拠地としていたためであろうか。この点も含めてヌール・アッディーンとサラディンの政策の違いは後に検討することにする。

六／十二世紀中に建てられたことが確かである三十七のマドラサ（一つだけ十一世紀のものを含む）のうち三十四は、支配者である軍人層あるいはそれに連なる人々によって創立され、二つが非軍人の学者、一つが不明である。ダマスカスにおいてマドラサの創立者として商人の名前が出てくるのは七／十三世紀に入ってからであり、それも七／十三世紀の半ばすぎになって少しずつ増えるようになってきた。⁽¹⁵⁾

法学派別に見ると、三十七のうち、ハナフィー派二十一、シャーフイー派十、マリーキー派二、ハンバリー派三、シャーフイー・ハナフィー両派一というふうに分れる。

iii. シリアの他の都市⁽¹⁶⁾

1. バアルベク 五五〇年以後にヌール・アッディーンによりシャーフイー派のマドラサが創立された。
2. ブスラー 五三〇／一一三六にアミール 'Izz al-Din Kumushakin によりハナフィー派マドラサ。
3. ハマ 五五〇年以後にヌール・アッディーンによりシャーフイー派マドラサ。
4. ハマ 五八九年以前にアイユーブ家の一員の 'Taqi al-Din'umar により建てられた al-Muzafariya
5. ハッラーン ヌール・アッディーンによりハンバリー派マドラサ。
6. ホムス 五五〇年以後にヌール・アッディーンによりシャーフイー派マドラサ。
7. エルサレム 五八八年にサラディンによりシャーフイー派マドラサ。
8. エルサレム サラディンの息子アル・アフダル（五九二／一一九六没）によりシャーフイー派マドラサ。

9. マアッラト・ヌアマーン Ma'arrat al-Nu'mān シャーフィイー派マドラサ。おそらくはヌール・アッ・ディーンが創立。

10. マンビジュ 五六三年以後にヌール・アッ・ディーンによるシャーフィイー派のマドラサ。

11. マンビジュ 五六三年以後にアミール Qutb al-Din Ināl によるハナフィイー派マドラサ。

12. エデッサ 五八九年以前に4と同じ人物によるシャーフィイー派マドラサ。

このリストから直ちに言えることは、ハマやホムスのようなかなり重要な都市にさえマドラサが少ししかなかったということである。それには二つの理由が考えられる。一つは、地方の無名のマドラサは比較的記録からまれやすいということ。もう一つは、たとえこれ以外にもマドラサが存在していたとしても、その数はそれほど大きなものとは考えにくい。ということは、シリアにおいては文化的にも経済的にもダマスカスとアレppoの地位が他に抜きんで高く、圧倒的な集中が両者に見られたのではないかということ。

ダマスカス、アレppo以外の地方については、最終的な結論を出すには研究が未だに不足している。したがってここでは前述の仮説的な説明以上につけ加えることは適当でないようである。

二 六／十二世紀中のマドラサ発展の背景

(1) 一般的背景

前章のリストから明らかのように、上メソポタミアではマドラサ建設の歴史はニザーミーヤとともに始まったのであるが、その後しばらく間が空き、六／十二世紀になってから本格化している。シリアの場合はニザーミーヤよりやや遅れて同じ五／十一世紀中に最初のマドラサの建設が見られたが、ここでも本格化は六／十二世紀も四半世紀すぎからのこと

である。

もっとも古いモスルとジャズイーラト・イブン・ウマルのニザーミーヤと、ダマスガスのサーディリーヤはともにセルジューク朝の政策に沿って建設されたものであろう。上メソポタミアの二つのニザーミーヤはセルジューク宗家のワジールの創立によるものであり、他のニザーミーヤと同じ意味を持っていたはずである。ニザーミーヤの建設の意図は記録には直接的には示されていないので、一般的な背景から推測していくしかない。これについて広く受け容れられている見解は次のようなものである。⁽¹⁷⁾

セルジューク朝はその勢力を拡大するにしがたい、イデオロギー的にもまた統治の実際的必要の上からも、ムスリム社会の代弁者としてのウラマー層と提携する必要があった。セルジューク朝が提携の相手として選んだのはアッバース朝カリフを頂点とするスンニー派のウラマーであった。カリフ・スルタン制を正統派の教義の中で確立させ、スルタン権力の拡大をシャリーアに反さないものであるという承認を得なければならなかった。スンニズムを正統的イデオロギーとして採用し、ウラマー層と提携するというセルジューク朝の基本政策の一環としてマドラサを建設し、大量にウラマー（特に法学者）を養成する必要があった。マドラサ建設は正統的法学の教育にその主要な目的があった。⁽¹⁸⁾ 正統的法学の中でも、セルジューク朝を始めトルコ系の諸民族はトランス・オクシアナ、東部ペルシャでハナフィー派の影響を強く受けていた。また一般的にはシャーフイー派がもっとも広く浸透していた。このためトルコ系の軍人層は、セルジューク朝も含めて、ハナフィー派とシャーフイー派法学を保護奨励し、それを正統派イスラムの中心とすると同時に、支配の正当性を支持するイデオロギーとしようとした。ニザーミーヤの場合、創立者ニザーム・アル・ムルク自身がシャーフイー派であったことと、セルジューク帝国という広大な国家の機関という性格を持っていたことの両方から、もっとも支持者の多いシャーフイー派のマドラサとして設立されたのであろう。

トルコ系軍事支配者とウラマー層の提携は、前者からの要請によってのみ成立したわけではない。ウラマー層の側にも

さまざまな考慮が働いており、ある面では妥協としてまた他の面では積極的な意味を持つ協力関係として成り立っていた。スンニー派ウラマーにとってマドラサの建設による組織的なウラマー、ことに法学者の養成は二つの大きな意味を持っていた。一つはシーア派の運動に対抗する目的である。第二にはスンニー派内部における法学の神学に対する優越の確立である。これら二つの目的の底にはイスラムの法学思想に共通の統一的秩序観が存在していることに注目すべきである。この秩序観は、セルジューク朝帝国の成立という政治的統一の気運とは互いに通じるところがあり、それを正当化するイデオロギーへと容易に変化しえたのである。

セルジューク朝がマドラサ建設の担い手となったことにより、マドラサはペルシャ地方に特有なものでなく、セルジューク朝領域のアラブ地域へも広がり、またセルジューク朝以外の非アラブ（主としてトルコ系）軍事集団も同じ政策を踏襲することになり、軍事政権の拡大とともにマドラサも急速に普及した。

上メソポタミアからシリアにかけてのセルジューク朝の支配はそれほど強力なものではなく、十一世紀後半から十二世紀にかけてさまざまな勢力が離合集散をくりかえしながら、各地に割拠していた。各地の勢力間には戦争が絶えず、比較的安定した支配を、ある程度広い領域にわたって維持できた勢力は数が少ない⁽¹⁹⁾。マドラサの建設という点からすれば、比較的強力で安定した政治勢力の存在、ある程度以上の人口と文化的伝統を持った都市の存在、地域の経済力がある程度以上に豊かであること、などの条件が重なった上で、支配者の側にマドラサ建設の意欲がなければならなかった。この点ではすべての非アラブ系軍事勢力にそれがあつたわけではなく、永続的かつ効果的な支配を望みかつそれだけの力のあつた者はそれほど多くはない。

ダマスカスに本拠を置くセルジューク家の Dugāq（四八八―九七〇―九五―一〇四）の時代はそのような条件を満たしていた。Dugāq のアミール Šādir によってダマスカスにシリアで最初のマドラサが建てられたことは、ダマスカ

スの持つさまざまな条件を考えればうなずける。

アレppoの場合はダマスカスより二十年遅れて最初のマドラサが建てられた。アレppoにもセルジューク朝の *Riḍwān* (四八八—五〇七/一〇九五—一一一三) が *Duḡāq* と同じ時代に居たにもかかわらず、マドラサ建設が見られなかったのはアレppoの特殊な事情による。アレppoはキリスト教徒住民も多い上に、ムスリム住民はシーア派が多く *Riḍwān* 自身シーア派に傾むいていた。アレppoで最初のマドラサはセルジューク朝勢力に代った *Artuq* 家の *Sulaymān* によって建設された。十二世紀初めアルトウク朝(いくつかの分家があった)は北シリア、上メソポタミアのトルコマンの指導者として、セルジューク朝やその周辺の諸勢力の間の複雑な争い、およびフランク(十字軍)とムスリム勢力との衝突において重要な役割を果たしていた。一一一八年以来アレppoをその支配下に収め、フランク勢力の東進を防いでいた。⁽²⁰⁾ このような状況を考えるならばアルトウク家によるマドラサ創立の意味はかなりよくわかる。

アルトウク家のマドラサ設立は、アレppoの支配権獲得の宣言のような意味を持つ。フランクと戦っている状況下では、キリスト教徒住民の意向はむしろ無視することの方が適切である。また正統派イスラムの擁護者であることを内外に示すことにもなる。シーア派住民を何らかのかたちで服従させることができればアルトウク家の名声は広く認められることになる。セルジューク朝に抵抗して北シリア、上メソポタミア一帯を支配していることも正当化される。このような考慮がマドラサ建設にあたって作用したであろうことは容易に推測できる。実際 *Najāḥiyya* 建設にあたっては、シーア派住民の抵抗が強く、建設にかなりの困難をきたしたとイブン・シャッダードは伝えている。⁽²¹⁾ このマドラサの建設は、アレppoにおけるスンニー派の勝利のシンボルとも言える。この後アレppoではマドラサやハーンカー(リバートも含めて)、モスクが建設されるようになり、多くの教会がイスラムの施設に変えられた。

その後に上メソポタミアやシリアで創立されたマドラサの背景を見ると、次のような要因が見られる。

ある地域の支配権確立の象徴として、あるいは支配権がある程度安定したことの象徴としてマドラサが建設されている。

る。つまりマドラサ建設は、セルジューク朝のニザーミーヤのところで述べたような支配の正当化の手段、法学者の養成といった目的に止まらず、ある種のステータス・シンボルになりつつあったといえる。これは支配者の場合だけではなく、その臣下の場合にも当てはまる。またフランクの攻勢は、ムスリムの側に政治的、精神的統一の必要を強く感じさせることにもなった。これはニザーミーヤ建設などの場合には見られなかった新しい要素である。これがマドラサ建設にどれほど刺激を与えたかは測り難いが、十一世紀中のマドラサ建設に比べて十二世紀になってからの方がずっと多いという事実は、何らかの影響があったことを物語っている。

(2) ヌール・アッ・ディーン

ニザーミーヤ以来のマドラサ建設は、ヌール・アッ・ディーンの時代に飛躍的發展を遂げる。前章のリストからも明らかのように、ヌール・アッ・ディーンはダマスカスとアレppoを中心にシリア全域に数多くのマドラサを建設し、マドラサ建設ブームの源となっている。マドラサ発展史の中でのヌール・アッ・ディーンの役割は、まず第一にこの量的な面における貢献を挙げることができる。

ヌール・アッ・ディーンのマドラサ（マドラサだけではなく他のイスラム的諸施設についても同じであるが）建設にかけた熱意はいったい何から来ていたのであろうか。⁽²²⁾ これまで述べて来た一般的な背景と異なるものがあったのであろうか。エリセーエフはアッバース朝カリフ、*al-Muqtafi*（五三〇—五五〇／一一三六—六〇）のワジール、イブン・フバイラ *Ibn Hubayra* の政策がヌール・アッ・ディーンに大きな影響を与えたと考えている。イブン・フバイラはスンニズムの勝利、政治的シーア主義の破壊、アッバース朝カリフの聖俗の権威の回復などを目指していた。⁽²³⁾ *Ibn Kathir* によればイブン・フバイラはヌール・アッ・ディーンに同盟を求め、エジプト（ファティマ朝）征服を行うことをすすめたという。⁽²⁴⁾ エリセーエフがイブン・フバイラのヌール・アッ・ディーンへの影響というときに、これだけを根拠にしている。イ

ブン・フバイラはハンバリー派で「スンナ」を重んじ、「シーア」を嫌悪するのは当然であり、アッバース朝のワジールとしてアッバース朝の権威回復を唱えるのも当然のことである。その呼びかけがヌール・アッ＝ディーンを動かして彼の政策な重要な部分を決定した、と考えるのはイブン・フバイラの影響力を過大評価しているのではないだろうか。むしろ当時の複雑なシリア、メソポタミアの政治情勢とフランクの活動の両方についての彼自身の利害と判断が、政策決定の基礎的条件となっていたと考える方が自然である。アッバース朝との関係、ファティマ朝エジプトへの態度も一義的にはその延長上にあると言える。もちろんヌール・アッ＝ディーン自身のスンニー派をイスラムの正統と考えそれを強化し広めようという信仰に基づく信念は、政治的判断と同じくらい重要な要因ではあるが、個々の行為や政策の中にどれくらいその信念が働いていたかを定めるのは難しいので、ここではヌール・アッ＝ディーン自身そういう信念を持っていたであろうと指摘するに止めておく。⁽²⁵⁾

さて、ヌール・アッ＝ディーンは具体的に何を目ざしてマドラサ建設や他の事業を行なったのであろうか。ヌール・ディーンの場合も支配権確立の象徴としてマドラサやモスクを建設したということや、ウラマー層の慈善的パトロンのとしてふるまったということもあつたはずである。しかしそれにも増して切実な政治的課題があつた。ヌール・アッ＝ディーンにとって、彼の領域内部のイデオロギー的統一は、彼の政治目標達成のために不可欠であつたのである。フランク勢力に対抗するためにも、シリアを統一するためにもそれは必要であつた。先ず第一にフランクに対抗するためにはムスリムの側の戦線統一と士気高揚が必要であつた。対フランクの聖戦 *jihad* を効果的に遂行するためにヌール・アッ＝ディーンは積極的な策をとつた。モスクやマドラサやスーフイーのためのハーンカーの建設は、スンニー派イスラムを正統派として再建強化し、ジハード意識を高めるための効果的な方法と考えられた。五四四／一一四九年にイナブの戦いでヌール・アッ＝ディーンはアンティオキアのレイモン Raymond に大勝したが、この直後にヌール・アッ＝ディーンはアレクサンドリアに二つのマドラサを建設した（アレクサンドリアのマドラサのリストの2と3）。これは明らかにヌール・アッ＝ディーンが

対フランクのジハードにおける自らの役割を自覚し、先に述べたことを実行し始めたと解釈できる。

スンニー派イスラムを正統として、それを統一のためのイデオロギーとして使うことは、対フランクだけではなくシリア内部、ひいては上メソポタミアやもっと広い地域の政治的統一にとっても有効であった。当面、アレクソなどの北シリア各地に存在するシリア諸派の住民をスンニー派に変え、イスマイル派などの過激分子は孤立させてしまう必要があった。シリア各地にマドラサを建設したのは、スンニー派イスラムが地方に浸透し、シャリーアの履行とウラマー層の拡大により統一的なイデオロギーと支配が行きわたることを意図したのであろう。

五五〇年代後半から六〇年代にかけては、ヌール・アッディーンの視野がシリアだけではなくもっと外へと広がったようである。ダマスカスを中心として、かなり範囲の広い政治・文化圏の構想を持っていたのではないか。特に文化的には、ヌール・アッディーン時代に彼や彼の部将たちによって建設されたマドラサの数は、シリア地方だけを背景とするものであると考えれば、かなり多すぎるように見える。ムダッリスの出身地を調べると東部ペルシャからアンダルスまで広汎にわたっており、明らかに全イスラム圏の一つの文化センターとして機能させようという意図があったと考えられる。そのような考慮は、たとえばマドラサの建設にあたってシャーフイー派とハナフィー派のバランスをとったり、マリーキー派やハンバリー派のマドラサを建設したりすることにも現れている。シリアだけでなく広い範囲から人材を集め、また送り出すという意図とともにスンニー派イスラムの全体的な強化という考えもあったのであろう。ともかく、ヌール・アッディーンは、バグダードの地位低下ともあいまって、ダマスカスをイスラム世界第一の文化センターとした。

かくして、ヌール・アッディーンをマドラサ発展史上から見るならば、次のようなことが言える。ニザーミーヤはマドラサを全イスラム的な制度とする契機ではあったが、それを量的に実現したのはヌール・アッディーンである。ヌール・アッディーンはマドラサ建設の意図はきわめて具体的なもので、対フランクのジハードの遂行、シリアの統一に必

要なイデオロギー確立の一環として実行された。同時にその他さまざまな考慮も作用していたであろうが、この点がヌール・アッ＝ディーンにもっとも特徴的な点である。後期にはヌール・アッ＝ディーンは、少なくとも、文化的にダマスカスを全イスラム世界の一大センターにしようとしたのではないかと推測できる。

(3) ヌール・アッ＝ディーン以後

サラディンはあらゆる点でヌール・アッ＝ディーンの後継者であり、その事業の完成者であるともいえる。⁽²⁶⁾ マドラサ建設に関しては、サラディンはシリアよりもエジプト、とくにカイロに力を入れている。エジプトについては、シーア派の支配していたエジプトにスンニー派イスラムを再建確立するという明確な目標を持っていたが、シリアにおいてはそれがなかった。したがってシリアにおけるマドラサ建設は、ヌール・アッ＝ディーン時代のように君主主導型ではなく、アイユーブ家の他のメンバーやアミールたちによってなされた。

また一方で、この時代のシリアのフランク勢力は、その長期にわたる存在と、長期的な勢力後退傾向のために、かつてのような緊張感をムスリムに与えることは少なくなっていた。

シリアにはすでにヌール・アッ＝ディーン時代に各地にマドラサが建設されており、ダマスカスとアレppoには数の上では充分すぎるぐらいあった。

これらの要因が重なりあつて、ヌール・アッ＝ディーン以後のマドラサ建設は、かつてのような明確な目的意識を失つてしまっていた。個々のマドラサ創立者の意図はどうであれ、もはやマドラサ建設は支配層の一種のステータス・シンボルのような側面と、支配層とウラマー層の妥協的な提携関係を示すようになってきた。マドラサ建設の質的变化はこの時期にすべて現われてきたわけではないが、これ以後そのような傾向が着実に強まっていったとはいえる。

十二世紀末に見られるようになるマドラサ建設の目的の質的变化の背景としては、次のように要約できるであろう。

スンニー派イスラムをとりまく情勢が変化して、スンニー派の優越が確立しウラマー層の緊張が弱まったこと。トルコ系を中心とする軍事集団の政治的支配が長く続き、ムスリム住民、特にウラマー層との緊張関係が緩んできたこと。フランスの脅威はすでに過去のものとなりジハード意識が減退し始めたこと、などが挙げられる。

これらの要素すべてがサラディン時代以後には見られる。そして時代が進むにつれて一そう強くなっていった。マドラサ建設は、かくして、支配層や裕福な大商人などによってさかに行われ続けるが、その重要な目的は薄らいでしまい、マドラサにおける教育内容の質さえ固定化し低下するようになってしまった。⁽²⁷⁾

註

- (1) ニザーミーヤについては多くの研究がなされてきたが、ここでは G. Makdisi, "Muslim Institutions of Learning in the Eleventh Century Baghdad", *BSOAS*, xxiv, 1 (1961), 1~56 を主として使った。研究文献についても同論文を参照せよ。 *ibid.* 1~2.
- (2) ニザーミーヤも含めてそれ以後のマドラサの発展を一般的な歴史的文脈の中で論じたものの代表的なのは H. A. R. Gibb, "An Interpretation of Islamic History." *Journal of World History*, Vol. 1 no. 1 (1953), 39~62. 以下は同論文分。
- (3) Ibn al-Athir, *Lubāb fi tahdhīb al-ansāb*, Cairo, 1356 A. H., 1: 399.
- (4) Ibn al-Athir, *al-Bāhir*, Cairo, 1953, 9.
- (5) S. Diwāhijī, "Madāris al-Mawṣil fi al-'ahd al-atā-bakiya", *Sumer*, XIII (1957), 101~119.
- (6) Ibn Kathir, *al-Bidāya wa al-nihāya*, Beirut, 1966, XII, 227. Abū Shāma, *Kitāb al-rawḍatayn*, Cairo, 1956, Vol. 1. 65. etc. その他のマドラサについても同様の史料を参照した。
- (7) Ibn Jubayr, *Rihlat Ibn Jubayr*, Leiden, 1893, 16.
- (8) Sibī Ibn al-Jawzī 以下を Diwāhijī, 102 以下引用。
- (9) N. Elisséeff, *Nūr al-Dīn*, Damas, 1967 の巻末の Annexe VI を基本として *Bidāya*, Kāmil など補った。
- (10) Ibn Shaddād, *al-A'yaq al-khaṭira*, (ed. D. Sourdel) Damas, 1953, 96~121.; D. Sourdel, "Les professeurs de madrasas d'Alep aux XII^e-XIII^e siècles," *BEO*, XIII, 93ff. Ibn al-'Adim, *Tārīkh Halab*, Damas, 1951-68.
- (11) N. Elisséeff, *op. cit.* 第三巻末の Annexe III を参照した。
- (12) マドラサにはムダッリスは一人だが助手や代講が居ることもあった。コーラン諸学の教師など法学以外の教科の教師が数

人いるマドラサもあった。生徒の数は一定ではなかったが多くは五十人以下だったようである。Makdisi, *op. cit* を参照せよ。

- (31) Elisséff, *op. cit*, Annexe IV. 中央に引いた Ibn Shaddād, *al-A'iyāq al-khaṭira*, (ed. S. Dahhan) Damas, 1956, 199~264; Ibn 'Asākir, tr. N. Elisséff, *La Description de Damas d'Ibn 'Asākir*, Damas, 1959; al-Ilmāwī, tr. H. Sauvaire, "La Description de Damas", *JA* 1894-96, ser. 9 iii, 251~318, 385~501, iv, 242~331, 460~503.; al-Nu'aymi, *al-Dāris fī ta'rīkh al-madāris*, Damas, 1948~1951, 2 vols.

- (14) サラディンはカイロにこのほかに二つのマドラサを建設した。Magrizi, *Khiṭaṭ*, Cairo, 1854, II, 363 ノートを参照せよ。
- (15) al-Rawāḥiya 商人の Zaki al-Din Ibn Rawāḥa によつて多分十三世紀初めに建つた。Ibn Shaddād (ed. S. Dahhan), 241; Nu'aymi I, 265. その後ほとんど例がある。
- (9) Elisséff, *Nūr al-Din*, Annexe VI を基本に *Bidāya, Rawdatayn*; A. A. Badawī, *al-Hayāt al-iglyya fi al-hurūb al-sūlibiya* Cario, n. d. などと補足した。
- (17) もっとも一般的なかたちで簡潔にこの問題を論じているのは Gibb の論文(註を参照)である。Makdisi, *op. cit*. のこの問題に触れている。

- (8) マドラサの教育科目について Makdisi と Tibawi "Origin and character of al-madrasa" *BSOAS*, XXV,

2 (1962), 225-38) の論争がある。やはり法学教育が主たるものだと考えるのが妥当であろう。

- (6) この時期の上メソポタミア、シリアの状況については M. Baldwin, ed., *A history of the Crusades*, Vol. I, Madison, 1969 の第 V (C. Cahen), XIV (Gibb), XVI (Gibb) が詳しい。

- (20) Artuq 家については C. Cahen, "Artuqids", *EI*2 を参照せよ。なおティヤール・バクルにおおつてアルトゥク朝のマドラサ建設に熱心であったと Cahen は述べている。Ibn al-Azraq al-Fāriqī, *Ta'rīkh al-Fāriqī*, Cairo, 1959 によつてそのような記事は出てこない。Cahen が何に基づいて言つたのかは不明。

- (11) Ibn Shaddād (ed. Sourdel), 96~97.
- (22) ヌール・アッディーンの建設事業については N. Elisséff, "Les monuments de Nūr ad-Din," *BEO*, XIII, 5~43 が詳しい。

- (23) Elisséff, *Nūr al-Din*, 750.

- (24) *Bidāya*, 231.

- (25) ヌール・アッディーンの信仰心についてはあらゆる年代記や伝記辞典が高く評価しているが、割引いて考えなければならぬのは当然である。

- (26) サラディンの歴史的評価についてはいろいろあるが H. A. R. Gibb "The achievement of Saladin," *Studies on the civilization of Islam*, Boston, 1962, 91~107 など、

い評価を与えすぎているくらいはあるが、説得力がある。

(27) マドラサ建設ブームはエジプトに引き継がれアイユーブ朝

時代からマムルーク朝時代にかけて非常に多くのマドラサが建設された。Khairi, 362 以下を参照せよ。

後記

この小論ではマドラサに直接かわったウラマー層のこと、各法学派をめぐる問題、マドラサ以外の教育施設などについて触れなかったが、稿を改めて取上げることにする。またウラマー層に対するマドラサと対応するかたちでスーフィーあるいは民衆の宗教感情を充たすために、ここで取りあげた時代に多くのリバート、ザーウィヤ、ハーンカーが、マドラサを建設したのと同じ支配層によって建設された。この問題も稿を改めて論じたい。